

移住者が語る恵那の魅力

ええなあ 恵那での暮らし



三郷町佐々良木の西棚田 写真提供：今井友香さん（岐阜市）



「恵那は田舎で何もないところ」「専門的な勉強、都会にしかない仕事があったら、出て行った方がいい」このように思っている人が、あなたの周りにいませんか。確かに、自分がやりたいことの全てが、恵那でできるとはいえませんが、しかし恵那は、何もないところ、何もできないところなのでしょうか。

今回は、転出入の現状と、移住者から見た恵那の魅力を紹介いたします。恵那での暮らしを、改めて見つめてみませんか。

問 移住定住推進室 26-2111（内線338）

転出が続く現状

マイナス202人。昨年の本市への転入者から、転出者を引いた数です。

転入・転出を比べると、1999年からは転出の方が多く、ここ数年は、毎年平均で200人前後の転出が続いています。

さらに細かく見ていくと、20代、特に女性の転出割合が多いことがわかります。主な転出理由は職業上がトップ、次いで結婚等、学業上となります。

高校卒業時、進学しようと考えると、恵那から通える学校は限られてしまいます。就職でも職種が限られてしまうため、若者世代が一度恵那を離れると再び戻ることが少ないという事実

転入者の中には移住も

もありません。では、125人。この数字は何を表しているのでしょうか。

これは、昨年度、本市に移住定住した方の人数です。ここ数年、約50世帯、130人前後の方が恵那に移住してきています。

移住してきた方に、恵那での暮らしを聞くと、
□アクセスが良く、田舎に住みながらも都会に出やすい
□市街地のスーパード大体の物が入っている
□移り変わる自然を間近で堪能できて、生きた心地がする
など、肯定的な言葉が多く聞かれます。

未来の人材の学びの場を設置

現在、市では、さまざまな取り組みを始めています。若者世代の流出に対しては検討委員会を立ち上げ、アンケート調査や大学への聞き取り、実証実験などを元に、昨年7月「恵那未来キャンパス」を開設しました。

恵那未来キャンパスでは、最先端のITやデジタルスキルを学ぶとともに、都会で行われているような講義などを、恵那にいながら受けることができます。**子育て世代への支援を充実** さらに、子育て支援にも力を

「何もない」を見直そう

入れ、高校生世代までの医療費を無償としました。その他、多子世帯の児童福祉サービスの無償化、公園の再整備などで、さらなる充実も図っています。

次ページからは、移住者へのインタビューを通して、外の視点から見た恵那を紹介します。私たちは、恵那にないものを外に求めがちです。今一度、風土や文化、重ねてきた歴史、市の取り組みなど、ここに「ある」ものに目を向け、恵那での暮らしを考えてみませんか。

田舎暮らしランキング本で 全国1位に

月刊誌『田舎暮らしの本』2024年版「住みたい田舎ベストランキング」人口3万～5万人のまちの部門で、本市が初の全国第1位に選ばれました！さらに、東海エリア部門でも第1位となり、住みやすい町として高く評価されました。



人口3万～5万のまち		東海エリア	
総合部門	1位	総合部門	1位
子育て世代部門	1位	子育て世代部門	1位
シニア世代部門	1位	シニア世代部門	1位
若者世代・単身部門	12位	若者世代・単身部門	3位

このランキングは、移住や子育て、日常生活、交通、医療、就業などの施策や、自然や環境など、幅広い調査項目の集計で順位が決まります。暮らしやすい町にするため各施策を拡充してきたことや、各地域で移住者を積極的に迎え入れるために努力してきたことなどが評価につながりました。

new!

恵那市 移住情報サイト

移住情報をぎゅっと集めたサイトができました！恵那の魅力を、市内外の皆さんに伝えます。

市移住情報サイトグッドローカルえな



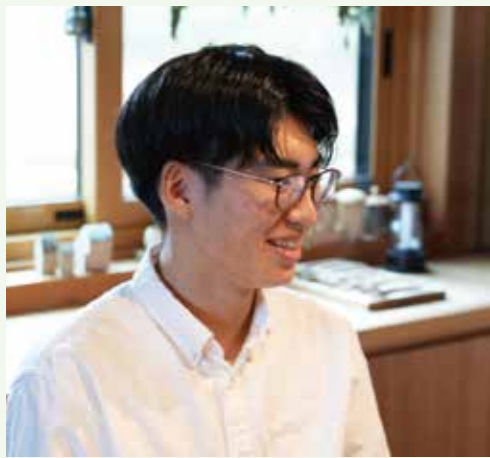
三郷町 村田朝熊くん (18歳)

平成24年3月、愛知県日進市から三郷町に父母と一緒に、親子で移住。

移住当時は小学校1年生だった朝熊くんは、現在高校3年生。高校生となった今、大学に進学して地域創生を学び、将来は恵那の活性化に役立てたいと考えている。

恵那が消滅するのは嫌だ
(朝熊くん) 中学校の総合学習の授業で、30年後には恵那は消滅する可能性があると聞いて、自分の育った町がなくなるのは嫌だと思いました。
高校で、自分でテーマを決めて研究を進める授業があったので、1年生では移住者を増やすにはどうしたら良いかを考えました。2、3年生では獣肉

自然の遊び場と、良い友達
(朝熊くん) 移住してきたときは、小学校1年生でした。元々、山や自然が好きだったので、トカゲを探したり川で釣りをしたりして、毎日飽きることなく遊びました。楽しかったです。同級生も多すぎず、友達と親密な関係を築くことができました。高校まで過ごしてみようと思うのは、「友達がい子ばかりだ！」ということ。人の良さは、恵那の魅力の一つです。



移住して11年、恵那がふるさと
(母・裕美さん) 私たちは、田舎暮らしがしたいという意思で移住しました。子どもは、親の思いに連れて来られたようなものだったと思います。だけど、恵那が大好きになり「恵那が消滅してほしくない、だから地域創生を学びたい」と、子ども自身が思ってくれたのが、何よりうれしいです。恵那への思いが、進路を決めた。暮らす中で、もう恵那がこの子のふるさとになっていったんだと思います。

村田さん家族の恵那の「推し」

地元の人にとっては当たり前にある里山の風景が、何よりも美しい。自然の中でさまざまな体験ができることは、貴重な地域資源だと思います。

- 小学生の頃の朝熊くん
- ❶ 雪の下からニンジンを取獲。うれしくて「見て！」
 - ❷ お気に入りの自宅の池。冬は天然のスケートリンク
 - ❸ 近くの川は、格好の遊び場だった



笠置町 藤村聡樹さん (57歳)

平成27年3月、神奈川県川崎市から笠置町に夫婦で移住。

聡樹さんは現在、笠置町移住定住委員会のメンバーとして、子どもの声が響く持続可能なまちを目指し、地域の方と一緒に移住者を受け入れるための活動を行っている。



自然と人々の暮らしが共存
恵那は、山があつて川があつて田があつて、そこに暮らしがある。まさに里山です。
自然と暮らしの両方を維持するというのは、実際やってみると大変です。でも、それをし続けてきたから、今の美しい里山の風景があります。それがすごいと思っています。

恵那の自然で、気持ち晴れる
以前住んでいたところは、コンクリートとアスファルトばかりで、いつも空がどんよりしているような印象でした。都会の生活は、満員電車で「苦しい」と言いながらも、お金を稼ぐことを考えなければならぬ。疲れとストレスが積み上がっていくものでした。今は、いろいろあつても、朝起きて自然を見るたびに、気持ちクリアになるのを感じます。



移住者を増やしたい
今、特に子育て世代を受け入れようとして、笠置町でも移住に力を入れていきます。実際、笠置に移住したいと空き家を待っている人がたくさんいます。町内には住んでいない家が約70件ありますが、空き家バンクに登録してもすぐ契約が成立するので、空き家が不足しています。農地や山を手入れし、里山の暮らしやコミュニティを維持していくためにも、ここで暮らしたいと思う人に、家を「預けて」もらえたら。地元の方に、恵那の良さを改めて感じてほしい、都会で生活している親戚や友人に「実家はあのままでもいいのか」と声をかけてもらいたいんです。困り事は移住定住委員会で一緒に考えていけたらと思っています。

当たり前にある「絆」
一時期、絆という言葉が流行りましたが、ここではそれが当たり前。絆だなんて思わないで、道路の土砂を取り除くとか、事故で倒れている人を助けるとか、そういうことを普通にみんながするんです。人とのつながりが当たり前のようであつて、もし災害が起きても、きつと近所同士で助け合うんだと思います。
ひけらかしたり、必要以上に自分を大きく見せたりしない人柄も、恵那の良いところだと感じます。



藤村さんの恵那の「推し」

帰り道にふと見る美しい風景、里山の文化、温かい人とのつながり。地元の人には普通のことでも、どこにでもあるものではないと伝えたいです。

- ❶ 自然と共に暮らす生活に笑顔がふれる
- ❷ どんど焼きは自治会の伝統行事。最後に餅を焼くところまでが楽しい
- ❸ 笠置町内の風景。雪化粧した田が太陽の光を浴びる

